

一橋大学におけるチューター活動状況 —2004年～2006年の3年間の分析—

河野 理恵

要旨

本報告は、2004年～2006年までの3年間を対象としてチューターが毎月留学生課に提出する報告書をもとに、以下の4点、①チューター数の推移、②チューター活動の総件数と総時間、③チューター活動の内容、④チューター活動が行われている場所、について分析をおこなった。同時に、分析の中で個人チューターと国際資料室のチューターの比較や役割分担についても考察した。その結果、次のことがわかった。1. チューター数は年々増加の傾向にある。2. チューター活動は1件あたり平均2時間以上行われている。3. チューター活動は主に学内施設のラウンジや宿舎で行われている。4. チューター活動の内容は国際資料室チューターの相談内容と重なる点が多い。

そして、最後にこれまでの問題点の改善状況と今後の課題について述べた。

キーワード：チューター、チューター活動、国際資料室、国際資料室チューター

1 はじめに

チューターとは個々の外国人留学生の勉学上のサポートをする日本人学生のことを指す¹。本学では学部に入学者に最初の2年間、大学院留学生には修士の1年間、これ以外に、交換留学生、日本語・日本文化研修生（日研生）、研究生、留学生センター研修生（10月来日は半年間）にも1年間チューターを割り当てている。このチューターとは、修士論文と博士論文作成中の大学院留学生時に執筆のアドバイスをする論文チューターとは別である。

筆者は2005年3月に「一橋大学留学生センター研究シリーズ⑥」として『一橋大学チューター制度の調査報告（1999年～2003年の実態調査）』と題する報告書を出した。その中で5年間のチューター数、チューター利用者数の割合やチューターの紹介について報告した。また、年間のチューター時間数が際立って少ないケースや多いケースについて日本人学生と留学生に個別インタビューをおこない、その結果についても詳細な報告をした。それと同時に、2004年に留学生課が全留学生を対象におこなったアンケートの中の「チューター制度」についての設問に対する回答の分析もおこなった。

¹ チューターとは、外国人留学生の学習・研究効果の向上を目的とする指導を留学生個々におこなう日本人学生のことである。また、勉学上の指導に限らず、日常生活における様々な手続きについてのアドバイスも行っている。チューターには大学から1時間につき1,070円（2007年度実績）の謝金が支払われている（1ヶ月30時間、1年間120時間を上限）。

しかし、上記の報告書は個別インタビュー調査をおこなったものの、チューター活動の一つ一つを調査分析したものではない。

そこで今回は、毎月チューターが留学生課に提出するチューター活動報告書（資料 1 参照）の 2004 年から 2006 年の 3 年間分を主たる調査資料とし、①チューター数の推移、②チューター活動の総件数と総時間、③チューター活動の活動内容、④チューター活動が行われている場所、以上 4 点に焦点をあてて分析を試み、そこからチューター活動の全体像を把握する。また、分析の中で国際資料室のチューターとの比較や役割分担についても考察する。

次に、前回の調査報告で課題として残したものが、3 年経った現在どのように改善されたか、また改善されていないのかについて報告し、最後に今後の課題について述べたい。

2 2004 年～2006 年度のチューター数

表 1 をみると、チューター合計数は 2004 年 132 人、2005 年 133 人、2006 年 131 人であった。各学部や研究科のチューターの数、全体のチューター数の推移については特徴的なことは言えない。しかし、留学生総数が 2004 年 524 人、2005 年 522 人、2006 年 517 人と少しずつ減っていることからみると、この 3 年間、チューター数は相対的に増加しているといえるであろう。

また、どの年も学部生チューターより大学院生チューターが多い。この傾向は前回の調査報告と同じであった。

表 1: 2004 年～2006 年のチューター数の推移

所属		年度			合計
		2004	2005	2006	
学 部	商学部	11	28	21	60
	経済学部	15	8	7	30
	法学部	8	7	11	26
	社会学部	18	22	16	56
大 学 院	商研	25	18	20	63
	経研	17	16	15	48
	法研	7	9	3	19
	社研	15	15	13	43
	言社研	15	10	18	43
	ICS	1	0	6	7
	公共政策			1	1
	学部/大学院	52/80	65/68	55/76	172/224
合計	132	133	131	396	
留学生総数の変化	524	522	517	1563	

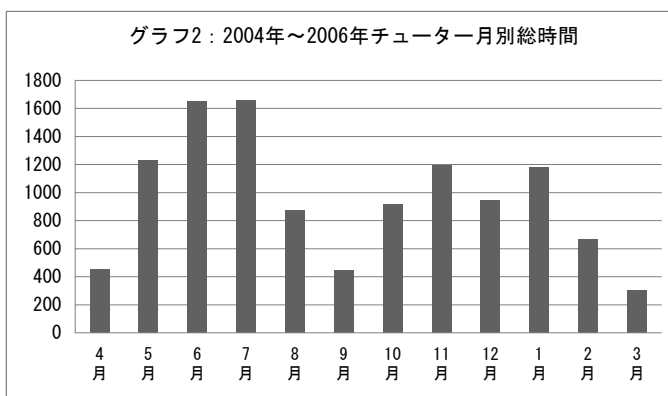
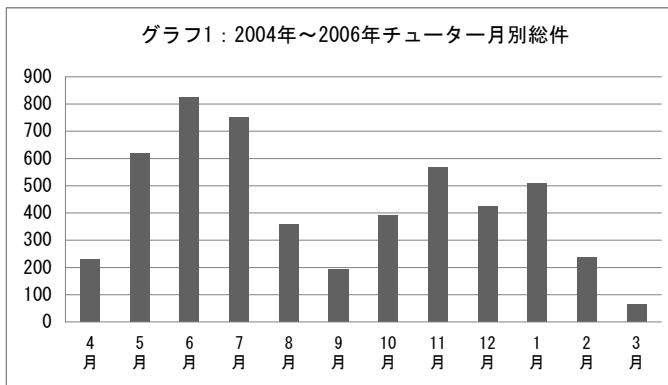
3 チューターの活動の総件数と総時間

グラフ 1 は 2004 年から 2006 年の 3 年間のチューターの月別総件数を表したものである。また、グラフ 2 は 2004 年から 2006 年の 3 年間のチューターの月別総時間を表したものである。グラフ 1 から総件数の多い月の上位 6 件をあげてみよう。順番に 6 月 (825 件)、7 月 (753 件)、5 月 (618 件)、11 月 (569 件)、1 月 (513 件)、12 月 (428 件) となっている。また、グラフ 2 から総時間の多い月の上位 6 件をあげてみると、7 月 (1,656 時間)、6 月 (1,653 時間)、5 月 (1,233 時間)、11 月 (1,196 時間)、1 月 (1,189 時間)、12 月 (954 時間) となっている。この 2 つの順位は、最初の 2 つの月の入れ替わりがあるが、6 月と 7 月の総時間の差はわずか 3 時間であり、相関関係をなしているといえる。ま

た、どちらも上位3件の月が夏学期に属し、4位～6位の月が冬学期に属している。

夏学期は新入留学生にとって日本語の授業についていくことはとても難しく、よくチューターを利用していることがわかる。しかし、通年科目は別として、夏学期と冬学期の授業が異なることを考慮すると、冬学期のチューター利用が全体的に減ることには疑問も残る。この現象は2004年～2006年の3年間を通じて全く変わらない。

また、グラフ1の合計



件数 5,170 件とグラフ 2 の合計総時間 11,211 時間から、チューター活動 1 件あたり平均 2 時間以上のチューター活動がおこなわれていることがわかった。

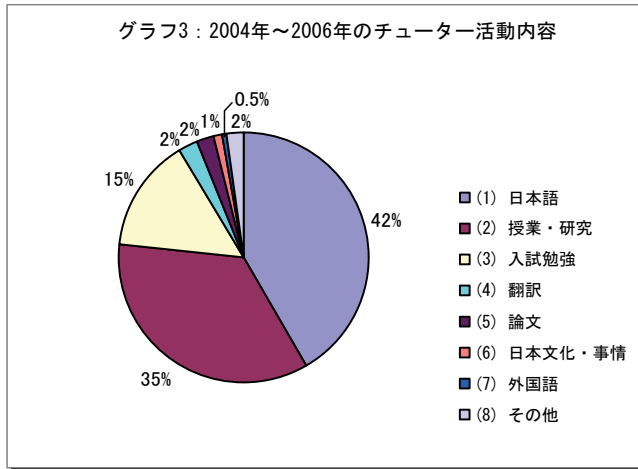
4 チューター活動の内容

チューター活動の内容の分類に関しては、井村（2004）を参考にした。井村（2004）は国際資料室²のチューターの2001年1月から2004年3月まで約3年間の相談内容を分析している。それによると、国際交流室チューターの相談内容の第1は、全体の約65%を占める留学生からの日本語チェックの依頼である。その次は日本人学生からの留学相談であるが、これはわずか5%である。以下、留学生からの生活相談約5%、授業・研究相談約5%、就職・進路相談約5%、国際資料室の利用方法の相談約5%、その他約10%と続く。

² 国際資料室は東キャンパス国際研究館一階にある。研究科博士後期課程所属の5名のチューターが月曜日から金曜日まで、それぞれ10時から1時、2時から5時まで常駐している。チューターの主な仕事は留学生の日本語の添削である。その他、国際資料室には留学生が閲覧できる雑誌があり、また留学を考えている日本人学生のための留学関係の書籍やTOEFLや中国語検定のための対策本などが貸し出し用に備え付けてある。

井村(2004)の上記の相談の大分類をそのまま個別チューターの指導分類に適用はできないが、日本人学生の「留学相談」以外の項目については利用可能なものがほとんどであった。よって、これらはすべて分類に取り込む形で、以下の大分類を作成した。

大分類は8項目、(1)日本語 (2)授業・研究 (3)入試勉強 (4)翻訳 (5)論文 (6)日本文化・事情 (7)外国語 (8)その他 である。グラフ3が2004年から2006年のチューター活動の内訳である。



以下、(1)から(8)まで個別に述べていくが、(1)日本語 (2)授業・研究 (5)論文 (8)その他は、内容が多岐にわたるため内訳を書いた表をそれぞれ示す。

4.1 「日本語」指導のチューター活動

チューター活動の中で一番多いのは、全体の41.7%を占める日本語指導(2,369件)である。

表2は日本語指導の内容をまとめたものである。上位3つの「文法・読み方等」、「レジュメ・レポート関係」、「読解」で約80%を占めている。

この表の中の「日常会話」は国際資料室のチューターにはない項目である。留学生は一般的に友達同士の会話や日本語のくだけた表現などを習いたいという欲求をもっている。また、日本に滞在していても日本語を始終話せる環境にあるとは言えない。この「日常会話」は個別チューター独自の活動として留学生にとって貴重なものであろう。井村(2004)

表2: 日本語指導の内訳

	件数	パーセント
文法・読み方等	926	39.1%
レジュメ・レポート関係	625	26.4%
読解(新聞・本等)	295	12.5%
日常会話	206	8.7%
作文	176	7.4%
古い文献	87	3.7%
日本語能力検定試験	23	1.0%
その他	30	1.3%
合計	2368	100.0%

の分類の中にも「その他の相談」の中に「雑談」という項目が入っており、この件数は全体の6%を占めている。井村(2004)は、「チューターとの何気ない会話が外国人留学生の会話練習や情報源、さらに日本人と口頭コミュニケーションが取れるという確認の場になっていることも考えられる。そのため他学生が閲覧等で資料室を利用している場合を除いて

は、チューターとの雑談も認めてもいいものとする」と述べている。筆者もこの意見には賛成ではある。しかし、国際資料室のチューターの役割の大半が日本語の添削であり、そして日本語の添削を待っている留学生が外にいる可能性を考えると、国際資料室のチューターが「雑談」で多くの時間をとられるのは好ましくないとする。この活動はやはり個別チューターの重要な活動の一つであるととらえたい。

「その他」にはディベート、発音矯正、ディスカッションなど5件以下のものをまとめた。

4.2 「授業・研究」指導のチューター活動

2番目に多いチューター活動は、全体の35.0%を占める「授業・研究」(1,987件)であり、表3はその指導内容をまとめたものである。

国際資料室のチューターはそれぞれ

表3: 授業・研究指導の内訳

	件数	パーセント
授業関係	779	39.7%
研究・専門分野	567	28.9%
ゼミ関係	351	17.9%
テスト勉強	207	10.5%
勉強・研究の仕方	40	2.0%
履修	11	0.6%
その他	9	0.5%
合計	1964	100.0%

5 研究科の博士課程の大学院生が月曜日

日から金曜日に分けて担当している

(2007年4月以降は一時的に経済研究科

のチューターが不在になり、商学研究科

のチューターが2人になっている)。

彼らは「授業・研究」一般については、十分に

アドバイスができる素質を備えているといえる。

しかし、同じ

授業をとっていないなかったり、ゼミや研究・専門分野が異なったりすると細かな相談に対応

することは難しく、やはり同じ授業をとっているチューターや同じゼミに所属している

チューターの指導には質と量の点で及ばない。

筆者は入学直後のオリエンテーションで、ゼミに参加する留学生にはなるべく同じゼミ

からチューターを捜すようにアドバイスをしている。本学のゼミ制度には他学にはない質

の高さがある。ゼミ指導を深く理解するためや、また自らも積極的にゼミに参加するため

には、やはり同じゼミのチューターの指導は欠かせないものとなる。

「その他」には司法試験や簿記など5件以下のものをまとめた。

4.3 「入試勉強」指導のチューター活動

3番目に多いチューター活動は、全体の14.7%を占める「入試勉強」(835件)である。

この場合入試とは大学院入試を指しており、つまり、研究生の入試勉強のチューター指

導が非常に多くを占めていることを表している。実際、「3 チューター活動の総件数と総

時間」の棒グラフからもわかるように、8月、9月、2月は大学が休業期間にもかかわらず、

チューター活動が一定量なされている。これは9月と2月に行われる大学院入試に備える

チューターの指導の多さを表しており、個別の報告書を見てもこの時期のチューター活動の内容には、入試勉強に関した「過去入試問題の解き方」、「研究計画書の書き方」や「面接の受け方」などが多く記載されている。

これは本学チューターの研究生の入試指導における役割の大きさを物語っている。長年チューターに関わる業務を担当している筆者の個人的見解ではあるが、研究生の大学院合格にはチューターによる入試指導が多大な貢献をしていると思われる。

4.4 「翻訳」指導のチューター活動

4番目は全体の2.4%を占める「翻訳」（135件）である。

翻訳指導の主なものは、日本語と英語間の翻訳である。授業で英語の教科書や教材が使用されている場合、留学生にとっては日本語で英語の内容を理解することは非常にむずかしい。そこで、翻訳指導をチューターに依頼する。

チューターを採用する際、英語力は考慮していないが、英語の読解力が一定以上のレベルであれば特に指導上問題になることはない。

4.5 「論文」指導のチューター活動

5番目は全体の2.3%を占める「論文」（130件）である。表4は論文指導の内容の内訳をまとめたものである。

表4: 論文指導の内訳

	件数	パーセント
修士論文	95	73.1%
卒業論文	24	18.5%
その他	11	8.5%
合計	130	100.0%

ここから、留学生修士1年生は1年生の時点から修士論文に関する指導をチューターに仰ぐことが多いことがわかる。また、それと同じく卒業論文に関しても学部生が早いうちから何らかの情報をチューターから得ていることがわかった。

「その他」には、論文データのテープ起こしや大学院生の学外での発表論文の指導など5件以下のものが含まれる。

4.6 「日本文化・事情」指導のチューター活動

6番目は全体の1.1%を占める「日本文化・日本事情」（64件）である。

この項目の内容は幅広い分野を網羅している。例えば、日本の外交問題や日本の歴史から若者文化にいたるまで様々なものが含まれる。

4.7 「外国語」指導のチューター活動

7番目は全体の0.5%を占める「外国語」31件である。

この指導は留学生が第二外国語として日本語と英語以外の外国語を履修した場合の指

導である。学部1年生がフランス語やドイツ語などを第二外国語として履修した場合、勉学上の負担は非常に大きくなる。しかし、入学当初はいろいろなことを勉強したいという気持ちが強く、あえて未修の外国語の履修に挑む留学生がいる。

4.8 「その他」の指導のチューター活動

8番目は全体の2.3%を占める「その他」(130件)であり、表5はその指導内容をまとめたものである。

表5:その他の指導の内訳

	件数	パーセント
パソコン関係	24	18.5%
学会・研究会関係	21	16.2%
奨学金・授業料減免関係	17	13.1%
就職活動関係	15	11.5%
図書館資料の調べ方	14	10.8%
インターン関係	13	10.0%
アルバイト	6	4.6%
その他	20	15.4%
合計	130	100.0%

ここから、パソコン関係の指導が多いことがわかる。近年、パソコンの使用率が上がり、そのスキルの向上も学生に要求されている。個人の発表も紙ベースからパワーポイント使用へと移行している。その趨勢を受けて、パワーポイントによる報告作成などをチュー

ターに手伝ってもらうケースが年々多くなっている。また、井村(2004)の項目にはなかった「インターン関係」の指導がある。インターンを経験するというのもここ最近の現象である。これについては、インターンの応募の相談やインターン先でどのような事に気をつければよいのかという相談が多い。

「その他」は年賀状の書き方や、最初に顔を合わせた時の今後のチューターのやり方の打ち合わせなど、5件以下のものをまとめた。

5 チューター活動の場所

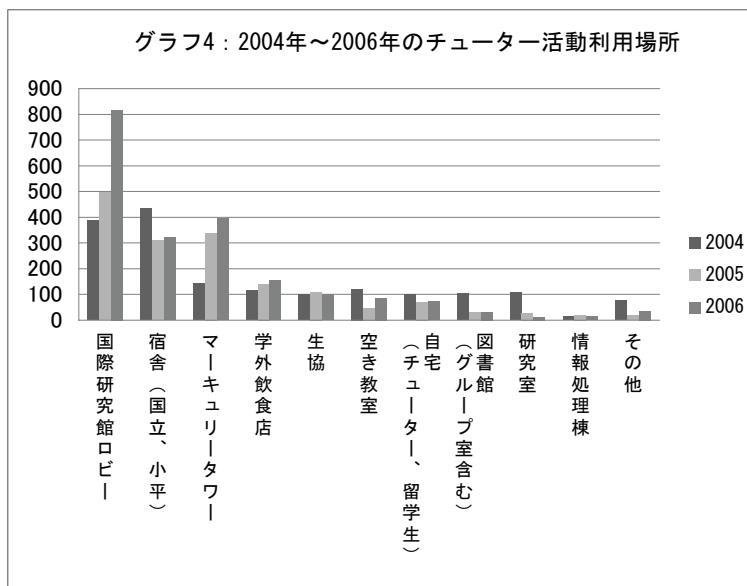
グラフ4は、2004年から2006年のチューター活動が行われた場所を示したグラフである。

活動の場所として圧倒的に利用されているのは、国際研究館ラウンジ(合計1,707件)である。次に国際交流会館・小平学生宿舎(合計1,080件)、そしてマーキュリータワーのラウンジ(合計885件)と続く。マーキュリータワーは2004年の完成以来、冬学期から本格的にその利用が開始され、2005年のチューターの利用数は2004年の2.3倍になっている。マーキュリータワーは大学院生用施設であり、各フロアにくつろげる快適なラウンジがある。チューター活動をおこなう公共の場所としては非常に適した空間と言える。マーキュリータワーでの利用率が上がるのに伴い、国際交流会館、小平宿舎、空き教室、自宅、図書館、研究室での利用が減っていることがわかる。

ここで注目すべきは学外飲食店の利用である。留学生課では学外の飲食店でのチューター活動はなるべく行わないように指導している。「3 チューターの活動の総件数と総時

間」のところでも述べたが、チューター活動1件に対して平均2時間以上の指導が行われている。このことを考慮すれば、学外飲食店で2時間以上勉強を行うことは公共マナーとしては決して好ましくない。しかし、留学生課の指導はあまり効果を発揮しているとは言いがたい。これは生協での利用が減らないのと同じ原因があるように思われる。チューター活動は留学生と飲食をともにしながら、友達感覚で気楽な雰囲気の中で行いたいという学生が一定数存在していることを表している。そして、生協よりも学外飲食店が好まれるのは、その雰囲気の良さであろう。

「その他」はICSキャンパスや講義棟のロビーなどの5件以下のものをまとめた。



6 前回の報告書の課題

前回の報告書では改善すべき点として以下の問題点を指摘した。

まず、夏学期、冬学期の授業のニーズに基づき、半年間でチューターを遠慮なく変更することができるようにしてほしいという留学生からの希望があった。この点については2004年の学期初めのオリエンテーションから「夏学期チューター」、「冬学期チューター」という言葉を使い、半年ごとのチューター交代は可能であることを新入留学生に周知している。このことによって、半年ごとのチューター交代は以前よりも頻繁になった。しかし、「3 チューターの活動の総件数と総時間」でみたように冬学期のチューター活動は夏学期に比べると少ない。このことからやはり冬学期のチューター活動が十分に機能していないといえる。

また、前回ではチューター活動を十分におこなえるだけの場所の確保の問題があった。

幸い、2004年にマーキュリータワーが建設され、場所の確保の問題は随分改善された。

さらに、国際研究館ラウンジの冬の寒さに対する留学生からのクレームに対しても、2006年にガラス張りの囲いがラウンジ全体に設置され、冬でも寒さを感じることはなくなった。

最後に改善されていない点について述べる。それはチューターに登録する商学部・商学研究科の日本人学生の少なさである。チューター募集は随時行っており、特に商学部・商学研究科のチューター募集については、年間を通して募集のお知らせを学内に張っている。しかし、その効果はなかなか現れない。

実際、2006年も夏学期から登録していた商学部の1年生2名に対しては年度最後までチューターを紹介できなかった。商学部の留学生1年生の数は他学部1年生に比べると圧倒的に多い。チューターが足りなくなるのはこの全体数の問題ととらえることはできるが、しかし、毎年チューター登録をする商学部の日本人学生が非常に少ない。それに比べて社会学部の日本人学生の登録は多く、毎年供給過剰である。

この問題は学部の学生気質によるものであろうか。

7 まとめと今後の課題

ここ数年、日本全体の留学生総数が頭打ちになっているのに伴い、本学の留学生数も減る傾向にある。しかし、チューターの総数は減ることはなく増え続けている。またチューターを担当しているのは大学院生が多く、大学院重点化に伴い今後もこの現象は続くであろう。

また、チューター活動の内容については多岐にわたるが、国際資料室チューターの相談内容と重なる点が多い。チューターがなかなか見つからない留学生や、チューター利用期間が終わった留学生にとっては、国際資料室のチューターは頼りになる存在である。彼らには是非国際資料室チューターを利用してほしい。井村(2004)は、今後の課題として国際資料室の存在の周知徹底を挙げていたが、現在、その存在は多くの留学生の知られるところとなっている。国際資料室が閉室になっている場合、必ず留学生が困って留学生課に問い合わせに行く。筆者は現在、国際交流室のチューター担当を井村から引き継ぎ、なるべく閉室にならないよう交代要員の配置に努めている。

次に今後の課題としては、上述したようにやはり、商学部・商学研究科のチューター不足解消が挙げられる。留学生の中には、先輩留学生をチューターにしてほしいと要望する学生がいる。チューター不足を考えると、先輩留学生の応援を頼みたいところだが、本来チューター制度の目的の一つに、留学生の日本人学生の友人づくりということがあることを考えるとなかなかそれには踏み切れない。

商学部チューターに関しては今後、商学研究科の留学生専門教育教員を通じてこの問題を研究科独自の問題として捉えてもらい、解決の方法を模索してほしいと考える。

また、冬学期のチューター利用の少なさについては、単に原因が大学生活への慣れからくるチューターの必要性の減少なのか、それとも別の要因が働いているのか、これについては改めていろいろな角度からの詳細な調査が必要だろう。

今回は紙幅の関係で、報告書の「成果・感想」については分析を行わなかった。これについても次回の調査報告に譲りたい。

参考文献

- 井村倫子（2004）「国際資料室における来室状況の分析－院生チューターの役割を中心に－」
『一橋大学留学生センター紀要』7, pp.46-59, 一橋大学留学生センター
- 河野理恵（2005）『一橋大学チューター制度の調査報告（1999年～2003年の実態調査）』一橋大学留学生センター教育研究シリーズ⑥ 一橋大学留学生センター

一橋大学におけるチューター活動状況

資料 1

年 月 日

一 橋 大 学 長 殿

学部・研究科

チューター氏名 印

私は、外国人留学生 に対し、 月中に
次のおり課外指導を実施しましたので、報告します。

日	曜日	時 間	時間数	指導場所	指導内容	留学生 確認サイン
		: ~ :				
		: ~ :				
		: ~ :				
		: ~ :				
		: ~ :				
		: ~ :				
		: ~ :				
		: ~ :				
		: ~ :				
		: ~ :				
		: ~ :				
合 計						

成果・感想 (チューター記入)	
--------------------	--

上記のとおり指導を受けました。

年 月 日

学部・研究科

留学生サイン